

## 平成 18 年度(2) NBRP-情報-運営委員会 議事概要

開催日時: 2007年1月24日(水) 13:00 - 15:30

開催場所: 国立情報学研究所 12階 1208室

参加委員: 山崎委員長 磯野委員 菊池委員 倉田委員 小林委員 城石委員

菅原委員 鈴木委員 中村委員 深海委員 藤田委員 水澤委員

吉川委員代理 倉島 治

欠席委員: 荒木委員 長村委員 吉川委員 渡邊委員

オブザーバー: 科学技術振興機構 荻原 克俊

事務局: 国立遺伝学研究所管理部 研究推進室

### 【冒頭】

山崎委員長より本委員会開催の経緯等説明があり、オブザーバー荻原氏から挨拶があった。

### 【議事】

#### 報告事項

2006年11月に行われたプロジェクト推進委員会からのアンケート「第1期ナショナルバイオリソースプロジェクト終了後のバイオリソース事業の運営体制について」について資料3に基づき、山崎委員長から報告があった。

#### 審議事項

1. 第2期NBRP「情報」の計画構想案(資料4)を叩き台として議論し、以下のような意見があった。

#### 全体について

・全体的に表現が弱いように感じる。特に7-1-2、7-1-3については、第1期の具体的な成果の上に統合化(あるいはネットワーク強化)が必要である、というような力強い書き方が望ましい。

・現在公募中の「ライフサイエンス分野の統合データベース整備事業」と「NBRP 情報整備事業」との関係はどうなっているのか。

→今のところ関わりはない。公募中のプロジェクトであり内容が全く見えない状況で関わりを考えることができない。むしろNBRP 情報としてはリソース情報の統合化を先行して実施しているので、その連携を一層強固なものにして、将来的に必要なならば

「ライフサイエンスの統合データベース」に参加することも考えられる。しかし、両プロジェクトとも期限付きのプロジェクトである。

・国際化というキーワードが必要ではないか。

→7-1-3の「関連するライフサイエンスデータベースとの連携」を「国内外の関連するライフサイエンスデータベースとの連携」にする。

#### 7-1-1 安定運営とデータベースの改善について

・「技術支援」に留まらず「最新技術の提供」や「(人材)育成」を加えるべき。

・大項目に次世代育成に関する項目を追加すべき。リソース担当者を対象としたワークショップや研究会を利用して技術提供、教育(講習)、情報交流などできるのではないか。

→教育プログラムを情報センター独自で立ち上げるのは負担が大きいですが、宮崎大学や京都工芸繊維大などで進めている人材育成プログラムに協力することは可能。またワークショップや研究会をうまく利用すると何かできるように思う。

・リソース機関による完全なデータベースの自立的運用は可能か。

→これは難しいと思う。特にリソース情報と関連情報が一体化している大型のデータベースの場合、リソース機関が全体を運用することは負担が大きいだけでなく筋違いの場合もある。したがって、本プロジェクトで目標とするのはあくまでも「リソース情報」の自立的管理であり、実現方法はリソース毎に多様であるが、第2期で達成できる目標であると考えている。

・「自立」という表現が適切かどうか。「自立的管理」というとデータベースすべてをリソース機関が独立して管理するという意味にとれる。

→ほとんどのリソース機関はリソース情報を何らかの電子媒体(エクセル、ファイルメーカープロ、アクセスなど)で管理している。したがって適切なシステム(たとえばWeb上での更新ツールなど)があれば情報更新をリソース機関だけで行うことは可能である。そういう意味の「自立」だが、表現はもう少し検討したい。

・サブ機関のデータを中核機関が必ずしも管理しきれていない場合もあるのでは。

→中核機関のみならずサブ機関による情報更新も検討する。

・サーバーマシンはすべて遺伝研にあるのか。

→大部分は遺伝研にあるが、リソース機関にあってデータベース部分のみ遠隔で遺

伝研側が管理しているケース、あるいはかつて全てをリソース機関が管理していたが管理者の移動により維持できなくなって遺伝研に移行した例もある。

・リソース機関がデータベースにおいても自立するためには経費が必要であるが、第1期では情報センターがあるので予算申請が認められなかったという経緯がある。

・NBRP が終了した場合、遺伝研の生物遺伝資源情報総合センターの事業目標は変わるのか。

→センターのミッションは NBRP に関わらず遺伝資源情報の整備(支援)である。したがって NBRP が終了してもリソース機関の状況に応じて、リソース情報が恒常的に提供できるようサポートできる。

#### 7-1-2-5 省庁連携について

・「省庁連携」という言葉を提案書に入れるのは無理があるのではないか。

・各プロジェクトがそれぞれの分野(基礎研究用リソース、医療研究用リソース、工業用リソースなど)で肅々と事業を推進するしかないのではないか。結果として利用者が分野を意識してリソースデータを便利に利用できるようになればよいのではないか。

・学会のデータベースを情報センターがサポートすることは可能か？微生物では学会主導で実質省庁連携の統合データベース化が進められている。

→NBRP で学会をサポートするのは難しいと思われる。

・All Japan BioResource Portal Site ではなく、ナショナルバイオリソースポータルサイトの方が表現として好ましい。

#### 8 達成目標について

・「プロジェクト終了時に次世代を担う人材が育成できている」というような発展的な内容を加えるべき。

#### 運営委員会のメンバー構成について

・第1期は比較的情報に強いメンバーが多かったが、サポートを必要としているリソース中核機関の担当者などに入ってもらう方がよいのでは。

・実験と情報の両方に関心のある若い世代の利用者を加えるのはどうか。また委員会自体を公開型にするのはどうか。(例えばオブザーバーとして参加いただき、場合によっては事例紹介を行っていただく等)

->議論を効果的に行うために必要なメンバーを加えるのはよいが、適切な人数でないと逆に全く議論が出来ない、意見が出ない場合もあるので慎重に検討すべき。

## 2. GAIN の第 2 期事業計画について倉島氏(吉川委員代理)から説明があり、以下の質問・意見があった。

・大型類人猿で扱う範囲はどこまでか。厚生労働省のリソースバンクにあるようなカニクイザルなどは入らないのか。

->NBRP にはニホンザルのリソースもあるが、ニホンザルは侵襲的研究に使われる一方、大型類人猿は非侵襲的研究にのみ利用が制限されている。したがってリソースとしてではなく、情報整備の中で活動を行っている。

・サンプル採取の際、感染症などの問題がないか。またそういう情報はリソース配布先に提供されているのか。

->病理データは提供しているがウイルスチェックはできていない。

・ウイルスチェックができると提供元の飼育施設にとっても便利なのではないか。

## 3. 配布資料に基づき菅原委員から GBIF の国内外の状況に関する説明があった。

・拠出金を出さない場合でもデータを提供することは可能なのか。つまり NBRP でサポートされている国内活動については日本が GBIF のメンバーではなくなっても継続できるのか。

->継続できる。

## 4. ナショナルバイオリソースプロジェクト推進委員会の報告

城石委員から推進委員会の報告があった。

最後に、山崎委員長から

第 2 期のナショナルバイオリソース事業の公募は 2 月上旬頃になりそうだが、提案書の議論のために再度委員会を開催することをせず、メールで委員の皆様のご意見を伺い、最終的にご確認いただいたものを提出したいので、よろしくお願ひしたいとの発言があり、委員への謝辞が述べられ、閉会した。